

お茶うけ 第67話

上野動物園

久しぶりに東京の上野動物園に行きました。平日の午後で入園者も少なく、ふと子供の頃の「動物園ののどかな午後は…」の歌詞を思い出しました。

表門を入ると直ぐ右手に、人気の高いパンダの屋舎があります。それほど人が多くないのに、係員が周期的に繰り返す「立ち止まらないで下さい。前に進んで下さい」の声に急かされ、パンダの檻の前の薄暗い通路を出て、左寄りに真っ直ぐ進むとゾウ舎がありました。ちょうど2頭のゾウが放し飼いの広場(放飼場と言う)でゆっくり歩いています。

上野動物園でもゾウの放飼場と観客の間には、仕切りの役目をする濠(空濠)が掘ってあるだけです。こんな簡単な仕掛けだけで本当に安全なのか、ゾウが濠に落ちることはないのかなと心配になりました。



調べてみると、実際の上野動物園でゾウが濠に落ちてしまったことがありました。

1967年(昭和42年)3月にゾウのインディラが、同居中のジャンボと放飼場で小ぜりあいをして濠に落とされ、濠から観客側へ上がって、柵を越え園内の道路に出てしまったのです。若い飼育係が必死になってインディラの足にチェーンを巻きつけて、暴走することだけは何とか止めました。しかし、30人もの飼育係が総掛かりでチェーンを引いて部屋に連れ戻そうとしても、インディラは足を踏ん張ってビクとも動きません。飼育係の誰もが、こんな時に落合正吾さんがいてくれたらと思いました。落合正吾飼育係はゾウ飼育のベテランで、インディラとジャンボが来日した時からずっと愛情を持って世話をしてきた人ですが、前年の9月に胃ガンの手術を受けて、当時は肝炎を併発して自宅で療養中でした。

その時、誰かが「落合さんが来た！」と叫びました。見ると、短身・瘦躯、ひげがのび、眼の落ちくぼんだ落合さんが、どてら姿のまま、愛用の調教棒をもって立っていました。「インディラ、俺だよ。ホラ、戻れよ、部屋へ戻るんだ！」。病人とは思えない稟とし声を聞くと、にわかにインディラの緊張が解け、硬直していた尾も柔らかく垂れました。大勢の飼育係が必死になって引いても動かなかったインディラが、体重40kgの病人の手に押されてゆっくりと歩きだしました。

この緊急事態は、慈愛に満ちた飼育係とゾウとの信頼関係によって救われたのです。

その日から1週間後に、落合さんは「インディラのやつ」の最後の言葉を残して亡くなりました。

このようにゾウは濠に落ちることがあり、特に放飼場で複数のゾウが一緒にいるときに、その中の一頭が他のゾウに押されて落ちるケースが多いようです。落とされたゾウは、落とされたゾウがいる放飼場に戻るのを嫌って、どうしても観客のいる方へ上ろうとします。それを防ぐには、濠の観客側の壁を高くすればよいのですが、それではゾウが観客からの圧迫感を受けて好ましくないので、動物園では、むしろ観客の立つ地面の高さを、放飼場の地表面よりも少し低くしています。

ゾウが放飼場よりも低い観客側へ上がらないように、放飼場と濠と観客側の柵までの範囲は、次のように配慮して設計します。

濠の底は平坦部分を作ってゾウが歩けるようにします。濠の側壁は、放飼場側は勾配をゆるくし、観客側は勾配をきつくします。さらに観客側の側壁の上に垂直の縁をつけ、縁の上端が放飼場の地表面よりも高くなるようにします。観客側の柵は、濠に落ちたゾウが鼻を伸ばしても届かないように離れた位置に立て、また柵と側壁上の縁の間には、観客が踏み込めないように丈の低い樹木を植えます。

全国の動物園は、こうしたいろいろなデータや経験を持ち寄りノウハウを共有して、野性動物の飼育と園内の安全確保に役立てています。

一般に動物園の使命は、(1)レクリエーションの場、(2)教育の場、(3)研究の場、(4)自然保護(種の保存)の場であると言われます。最近では、動物園が(4)の種を保存する場として注目されています。上野動物園でも、展示・飼育している野性動物を計画的に増殖して「種の保存」を図るという「ズーストック計画」を推進しています。

5月に佐渡トキセンターで孵化したトキのヒナも順調に成長して欲しいと思います。

以上

参考資料:

『動物と私の交響曲 - 魅せられて六十年』 中川 志郎著 東京新聞出版局刊

『動物園の博物誌』 小原 二郎著 中国新聞社刊